令和６年度全国水産試験場長会全国大会（長野）

要　　録

期　日：令和６年 11 月７日（木）
会　場：ホテル信濃路
　　長野県長野市中御所岡田町 131-4
主　催：全国水産試験場長会

目次

１　大会の構成
（１）大会日程・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１
（２）大会次第・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２
（３）出席者名簿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３

２　挨拶
（１）会長・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５
（２）来賓・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７
（３）開催県・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

３　報告
（１）会長報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
（２）令和５年度の活動結果と令和６年度の活動計画について（資料１）・ 17
（３）国への要望「地域の抱える懸案事項」等について（資料２）・・・・ 24

４　情報交換
・北海道の水産資源にみられる気候変動の影響・・・・・・・・・・・・・・27

５　話題提供
・長野県における水産業と研究業務について・・・・・・・・・・・・・・・・30

６　優秀研究業績全国水産試験場長会会長賞表彰
（１）審査委員長経過報告・講評・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
（２）副賞贈呈・挨拶・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
（３）会長賞受賞記念講演
①北海道・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
②富山県・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
③愛知県・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51

７　次年度開催県・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56

８　現地意見交換会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57

９　関係写真・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・58

１　大会の構成

（１）大会日程

大会行事	開催日時・開催場所
全国大会	令和６年 11 月７日　13:30～17:00 ホテル信濃路
現地意見交換会	令和６年 11 月８日　8:30～12:00 犀川殖産漁業協同組合　冬季ニジマス釣り場（長野市） 長野県水産試験場本場（安曇野市）

（２）大会次第

令和６年度全国水産試験場長会全国大会（長野県）

次　　第

日時　令和６年 11 月 7 日（木）13:30～17:00
場所　ホテル信濃路

１　開会
２　挨拶
　（１）会　長
　（２）来　賓
３　報告
　（１）令和５年度活動結果および令和６年度活動計画について
　（２）国への要望「地域の抱える懸案事項」等について
４　情報交換
　北海道の水産資源にみられる気候変動の影響
５　話題提供
　長野県における水産業と研究業務について
６　優秀研究業績全国水産試験場長会会長賞表彰式
　（１）審査委員長経過報告・講評
　（２）会長賞表彰式
　　・会長賞表彰
　　・副賞贈呈（地域水産試験研究等促進奨励会）
　（３）会長賞受賞記念講演
　　①「温暖化に対応するコンブ養殖技術の改良と普及」
　　－コンブ成熟誘導技術の開発－
　　（地独）北海道立総合研究機構稚内水産試験場　調査研究部
　　主査　前田　高志
　　（地独）北海道立総合研究機構函館水産試験場　調査研究部
　　研究主幹　秋野　秀樹
　　②「アカムツ種苗生産技術の開発に関する研究」
　　富山県農林水産総合技術センター水産研究所
　　主任研究員　福西　悠一
　　③「食味に優れた大型雌ウナギ生産技術の確立」
　　愛知県水産試験場漁業生産研究所
　　主任　稲葉　博之
７　その他
８　閉　会

（３）出席者名簿

○来賓

	機　関　名　称	役　職　名	氏　名
国等関係機関	水産庁　増殖推進部	部長	高橋　広道
	水産庁　増殖推進部研究指導課	課長補佐	大島　達樹
	国立研究開発法人　水産研究・教育機構　本部	理事長	中山 一郎
	国立研究開発法人　水産研究・教育機構　本部研究戦略部	研究推進コーディネーター	柴田　玲奈
	国立研究開発法人　水産研究・教育機構　本部研究戦略部研究調整課	課長	岡本　裕之
	（公社）日本水産学会	会長	東海　正
	地域水産試験研究等促進奨励会		
	（一社）全国水産技術協会	会長	川口　恭一
	長野県農政部	部長	小林　茂樹

○海面

北海道	（地独）北海道立総合研究機構　水産研究本部 中央水産試験場	本部長兼場長	星野　昇
	（地独）北海道立総合研究機構　稚内水産試験場　調査研究部	主査	前田　高志
	（地独）北海道立総合研究機構　函館水産試験場　調査研究部	研究主幹	秋野　秀樹
東　北	（地独）青森県産業技術センター　水産総合研究所	所長	吉田　達
	岩手県水産技術センター	副所長	太田　克彦
	宮城県水産技術総合センター	副所長	佐藤　公信
	福島県水産海洋研究センター	所長	平田　豊彦
北部日本海	秋田県水産振興センター	所長	阿部　浩樹
	山形県水産研究所	所長	阿部　信彦
	新潟県水産海洋研究所	所長	樋口　正仁
	富山県農林水産総合技術センター水産研究所	所長	辻本　良
		主任研究員	福西　悠一
	石川県水産総合センター	所長	福嶋　稔
東　海	千葉県水産総合研究センター	センター長	石黒　宏昭
	東京都島しょ農林水産総合センター	所長	中野　卓
	神奈川県水産技術センター	企画研究部長	一色　竜也
	静岡県水産・海洋技術研究所	所長	髙木　康次
	愛知県水産試験場内水面漁業研究所	所長	鯉江　秀亮
	愛知県水産試験場漁業生産研究所	主任	稲葉　博之
	三重県水産研究所	所長	土橋　靖史
瀬戸内海	（地独）大阪府立環境農林水産総合研究所水産技術センター	水産研究部長	山本　圭吾
	兵庫県立農林水産技術総合センター　水産技術センター	所長	長島　浩
	岡山県農林水産総合センター　水産研究所	所長	鳥井　正也
	広島県立総合技術研究所　水産海洋技術センター	センター長	若野　真
	徳島県立農林水産総合技術支援センター　水産研究課	課長	山本　浩二
	香川県水産試験場	場長	三木　勝洋
		総務課長	新上　洋子
		増養殖研究課長	中山　博志
	愛媛県農林水産研究所水産研究センター　栽培資源研究所	所長	清水　孝昭
	高知県水産試験場	場長	織田　純生
西部日本海	福井県水産試験場	場長	領家　一博
	京都府農林水産技術センター　海洋センター	研究部長	宮嶋　俊明
	兵庫県立農林水産技術総合センター　但馬水産技術センター	次長	森本　利晃
	鳥取県水産試験場	場長	石原　幸雄
	鳥取県栽培漁業センター	所長	丹下　菜穂子
	島根県水産技術センター	所長	安木　茂
	山口県水産研究センター	所長	野村　太郎

九州・山口	福岡県水産海洋技術センター	副所長	秋元　聡
	福岡県水産海洋技術センター　豊前海研究所	所長	江藤　拓也
	佐賀県玄海水産振興センター	副所長	吉田　幸史
	佐賀県有明水産振興センター	所長	中島　則久
	長崎県総合水産試験場	次長	桐山　隆哉
	熊本県水産研究センター	所長	森野　晃司
	大分県農林水産研究指導センター　水産研究部	上席主幹研究員	日髙　悦久
	宮崎県水産試験場	場長	大村　英二
		経営流通部長	神柱　武志
	鹿児島県水産技術開発センター	所長	外城　和幸
	沖縄県水産海洋技術センター	所長	上田　美加代
		企画管理班長	山田　真之

○内水面

東北・北海道	（地独）青森県産業技術センター　内水面研究所	所長	田村　直明
	福島県内水面水産試験場	場長	渋谷　武久
関東・甲信越	茨城県水産試験場内水面支場	技佐兼内水面支場長	根本　孝
	群馬県水産試験場	場長	阿久津　良和
	埼玉県水産研究所	所長	青木　伯生
	新潟県内水面水産試験場	場長	佐藤　将
	山梨県水産技術センター	所長	岡崎　巧
	長野県水産試験場	場長	荒井　一哉
		環境部長兼佐久支場長	上島　剛
東海･北陸	岐阜県水産研究所	所長	後藤　功一
西日本	滋賀県水産試験場	場長	酒井　明久
	福岡県水産海洋技術センター　内水面研究所	所長	吉岡　武志
	宮崎県水産試験場内水面支場	支場長	田口　智也
		主任技師	林　悠真

○開催県

事務局	長野県水産試験場	専門研究員	小川　滋
		研究員	小松　典彦
		技師	田代　誠也
		技師	竹内　智洋
	長野県農政部園芸畜産課水産係	課長補佐兼係長	宮本　周司
		技師	白鳥　史晃
		技師	丸山　瑠太

２　挨拶

（１）会長

全国水産試験場長会会長（宮崎県水産試験場長）　大村　英二

みなさん、こんにちは。ただ今、ご紹介にあずかりました、本年4月から全国水産試験場長会の会長を努めております、宮崎県水産試験場長の大村でございます。令和6年度全国水産試験場長会の開会にあたり、一言、ご挨拶申し上げます。

まずは、会員の皆様には、令和6年度全国水産試験場長会全国大会にご参集いただきまして感謝申し上げます。

また、日頃より、ご支援・ご指導を賜っております水産庁増殖推進部長の髙橋様、水産研究・教育機構理事長の中山様、日本水産学会会長の東海様、全国水産技術協会会長の川口様、それから長野県農政部長の小林様をはじめ、多数のご来賓の方々にも、ご多忙の中、当大会へご出席いただきまして、誠にありがとうございます。この場をおかりしまして厚くお礼申し上げます。

さて、今年は元旦に最大震度7を記録しました能登半島地震にはじまり、8月の宮崎県日向灘を震源とする地震、これに続く南海トラフ地震臨時情報、それから、全国で多発する大雨による被害など、枚挙にいとまがないほどの災害が発生しております。被害を受けられました方々には、心からお見舞い申し上げますとともに、一日も早い復興を願っております。このような災害は、自然を相手にする水産業に対して甚大な影響を与えますが、今回の挨拶を考えるうえで、少し気になりまして、過去4～5年分の歴代会長の挨拶に目を通してみたところ、毎年、冒頭に災害の話が書かれております。こうなりますと、もはやリスクというより常態化している状況といっても過言では無いのではと感じたところであります。このような異常気象の常在化の中で、それぞれの地域の水産業の成長産業化を実現していくためには、水産庁や水産研究・教育機構などとの一体的な施策や研究開発の必要性が、過去に無いほど重要性を増しているのではないかと感じております。

全国水産試験場長会の話に戻しますが、ご案内のとおり、当会は約 70 年におよぶ歴史を有しており、この全国大会は平成 23 年度から開催されております。この全国大会では、水産業の発展に寄与すると認められる業績を優秀研究業績として表彰しており、後ほど、審査委員長を務めていただきました沖縄県の上田所長様よりご報告がございますが、今大会においても三つの業績を表彰するとともに、それぞれの研究について、記念講演をいただくこととしております。私自身も、審査会のオブザーバーとして参加しておりましたが、いずれの研究業績も成果は勿論でありますが、それぞれの成果が、即、現場実装に繋がり、かつ、経済的なインパクトが高いなど、レベルの高いものであることに感銘したところでありまして、私の水産試験場の

若手職員も見習ってほしいと思い、資料を共有させていただいたところであります。

また、受賞者の方々には、全国水産技術協会の川口会長様が代表をされております地域水産試験研究等促進奨励会様から副賞を頂いております。更に、昨年度に日本水産学会の東海会長様のお計らいにて、40 歳未満の研究者を対象とした農林水産技術会議の若手農林水産研究者表彰にも応募をしておりまして、来年度も今回の受賞業績から対象となる研究者の方に応募していただく予定でございます。このような機会は、若手研究者の一層の意欲向上に繋がると考えておりますので、奨励会の皆様並びに東海会長様には、心から感謝を申し上げます。

最後になりますが、本大会は、年に一度の会員や関係者が一同に会する貴重な機会でありますので、有意義な大会となりますよう、皆様のご協力をいただくとともに、本大会の開催にあたりまして、多大なご尽力をいただきました長野県水産試験場の荒井場長様をはじめ、園芸畜産課水産係の皆様方に、心から御礼を申し上げまして、開会の挨拶とさせていただきます。

本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

（２）来賓

水産庁増殖推進部　部長　髙橋　広道

皆さん、こんにちは。只今御紹介いただきました水産庁増殖推進部長の髙橋でございます。本日の全国水産試験場長会全国大会の開催にあたりましてご挨拶をさせて頂きます。

本日ご出席の皆様方におかれましては、水産業の振興を図るため、日頃より水産関係の試験研究及び技術開発の推進にご尽力頂き、この場をお借りして、改めてお礼申し上げます。また、本全国大会の開催準備にご尽力をいただいた長野県の関係者の皆様にも、改めてお礼申し上げます。

水産業に限らず、あらゆる産業において試験研究というのは重要であることは研究者の皆様の前で言うまでもないことかと思います。特に水産業は今の海洋環境の変化、地球規模の環境の変化にも対応しなければいけないということで、いっそうの試験研究、技術開発の発展が不可欠な状況となっております。水産試験場の皆様が取り組まれている地域に根差した水産研究というのも、それぞれのエリアで課題を解決するため大変重要となっていると考えております。

私も農林水産省に入省したわけでありますが、県庁への出向経験もさせていただいておりまして、今日も御参加していただいております三重県や福岡県にも出向しております。もちろん行政の方でしたけれども、私が担当した農業も水産業も担当する立場でしたので、水産試験場の皆さんと一緒に政策を考えるに当たって議論させていただいたり、勉強させていただいたりしたことがありますので、如何に皆さんが日頃いろんな課題に奮闘なさっていただいている、いろいろな政策課題の解決にご貢献いただいているか、重々理解しているつもりでございます。そうした各現場でご活躍いただいている皆さま、特段場長の皆様方がこうして一同に会するこの大会は意義深いものであると考えております。今回の開催の御担当である長野県水産試験場様は信州サーモンの作出やニジマスを活用した内水面漁業の活性化などで大きな成果をあげられており、地域の水産業に活かす研究開発の可能性を示す好例であると考えております。

さて、水産庁側から感謝とお願いをさせていただきたいと考えております。水産行政の最重要課題である資源管理につきましては、令和２年９月に策定しました「新たな資源管理の推進に向けたロードマップ」に基づき、科学的根拠を踏まえながら推進してまいりました。皆さまのお力添えをいただき、おかげさまで、令和４年度にはMSYベースの資源評価が 38 資源となる等の成果が上がっており、この場をお借りいたしまして、関係都道府県の皆様方のご協力に対しお礼申し上げます。

令和６年３月にこれらの成果を踏まえて、MSY ベースの資源評価を 45 資源程度に拡大する等、令和６年度以降の具体的な取組を示した「資源管理の推進のための新たなロードマップ」を策定・公表いたしました。

引き続き、資源管理の科学的根拠となる資源調査・評価を着実に実施するとともにその高度化に取り組んでいくためには、関係都道府県の水産試験場の皆様のご協力が不可欠でございます。水産庁としても、関係都道府県のご協力を仰ぎながら、政策を推進していく所存でございます。

今後も日本の水産業の発展のために、これまで以上に皆様と連携して取り組んで参りたいと考えております。

最後になりますが、本日会長賞を受賞される方々を始め、ご出席の皆様方のご活躍とご健勝、また、本日の大会が実り多いものとなるよう祈念しまして、私のご挨拶とさせて頂きます。

国立研究開発法人　水産研究・教育機構　理事長　中山　一郎

皆様こんにちは。水研機構の中山でございます。本日は令和６年度全国水産試験場長会全国大会にお招きいただきまして誠にありがとうございます。私ども、普段より大村会長をはじめ場長会の皆様、それから、今回この回を運営されている荒井場長様はじめ長野県の方々には本当にいつもお世話になっております。ありがとうございます。

先ほども水産庁の高橋部長のお話しにもありましたが、現在水産を巡る状況は非常に大きな環境変化、それも大きな地球環境の変化だけでなく、さらに社会の変化も大きく変わってきております。食料安全保障の観点からも大きな転換点を迎えていると考えております。

さらに先ほどもありましたけれども、日本は震災、豪雨など脆弱な環境の中にあります。１月の能登震災、そして大雨の被害、その他日本各地でも大きな被害があり、食糧生産にも大きな影響があります。被害に遭われた方々にはお見舞いを申し上げます。研究サイドでも対応として何か備えておくことができないかと強く思っているところでございます。

ここでちょっとお時間をいただきまして、我々の情勢報告を簡単にさせて頂きたいと思います。まず１つ目です。令和６年度の全国水産業関係研究開発推進会議でございます。これは水研機構が開催する会議で、来年の２月 18 日、火曜日にビジョンセンター品川で開催することとしましたので、ぜひともご参加いただきたいと思います。今回も対面とウエブで行います。以前は場長会の幹事の方々が対面のみでしたので、参加者数が少ない会議でしたが、ウエブ併用ということで、昨年も数多い方々が御参加いただきました。誠にありがとうございます。ぜひとも皆さまの御参加をお願いしたいと思っております。

２つ目です。コロナ禍でずっと中止になっておりました一般公開、これを昨年再開いたしました。地元では「待っていました。」と嬉しい言葉をいただきまして、我々としても地域との連携は極めて大事だということ、この認識を新たにしたところでございます。

３つ目としては、機構として国際協力関係に非常に力を入れて進めているところでございます。地球の海は全部つながっていますので、世界の状況を一緒に何とかしていかなければというところで国際関係を強化しているところです。その一環として今年の６月上旬に北太平洋海洋科学機構 PICES(パイセス)主催の MSEAS(エムシーズ)という、これは社会科学系の会議ですが、これを開催いたしました。現地実行委員会への参画、そして、中旬には台湾漁業署との定期交流会をやったり、米国大気海洋気象局 NOAA(ノア)との MOU の再締結をしたり、それから、昨日まで私も参加しておりましたけれども、日米の天然資源の開発利用に関する会議等々、いろいろなことをやって国際関係に力を入れているところです。東南アジアでの SEAFDEC（シーフデック）などもいろいろと連携

をしています。来年はPICESの本会議が実は日本が開催国でということなので、横浜で開催する予定としております。さらに日仏海洋学会と水研機構で共同のシンポジウムを三重県の鳥羽で予定しているところでございます。

４番目のトピックですけども、機構の組織体制強化に向けた組織改編を行いました。これはデジタル庁が策定しました「情報システムの整備及び管理の基本的な方針」に則りまして、農林水産大臣が定める当機構の第５期中長期目標が変更されたことを受けて、３月にポートフォリオ・マネジメントという組織を作りまして情報の関係の体制整備を行いました。４月には研究分野を網羅した成果の最大化を目的として、情報セキュリティ対策、それから機構横断的な研究企画体制の構築、そして場長さん方の一番大事な地域との連携、これを強化するための組織を改正いたしました。具体的には研究開発全体を戦略的に企画調整する組織として、本部に研究戦略部というものを置きまして横断的な研究を進めるようにしました。あと地域との課題、機構との連携に関する相談窓口として地域研究連携監というものを新設しまして、本部付の人間ですけれども、全国８つの地域と２分野に配置するということで場長会様との連携も強化を図っているところでございます。

その他、我々の成果報告会は11月29日に東京証券会館ホールにて、「気候変動がもたらす水産業の変化」というテーマで開催する予定でございます。ぜひともご参加をお願いしたいと思います。

最後に本日は本当に盛大な全国大会開催おめでとうございます。水産の更なる振興に向けて、我々は現場との絆が最も大事だと思っておりますので、場長会の方々との連携をさらに深めるためにも、今回のこの会議が実り多い会議となることを祈念しまして私の挨拶をさせていただきます。ありがとうございます。

公益財団法人　日本水産学会　会長　東海　正

皆さん、こんにちは。日本水産学会　会長の東海でございます。まずは令和６年度全国水産試験場長会全国大会の開催、誠にお慶び申し上げます。大村会長はじめ場長会の皆様、今回の会場を準備いただきました荒井場長はじめ長野県水産試験場の皆様、厚く御礼申し上げます。また、このように挨拶の機会をいただきましてありがとうございます。

さて、水産学というのは学際的であり、社会学も含んだ応用学問ですので、水産の現場に近いところで研究に携わっていらっしゃる公設試、水産試験場の皆様と連携協力が重要であると考えまして、一昨年度よりこの会議に参加させていただくようにしております。

まずその連携の一環として、今も全国水産試験場長会から各県持ち回りということで日本水産学会誌に「水産の研究のフロントから」、こちらに各水産試験場の御紹介をいただくような原稿をお寄せいただいております。非常に業務多忙な折に御寄稿いただきまして誠にありがとうございます。民間の就職が好調ではありますが、学生などを見ておりますと、水産学を学ぶ学生の中には一定数必ず水産の専門を活かしたいという学生がおります。こういう学生は県を受けて水産の職に付く、あるいは水産試験場で仕事をしたいと希望しておりますので、うまく水産学会誌の中でアピールをしていただければありがたいかなと思っております。実際に、現在日本水産学会の正会員約 2,500 名弱いるうち、名簿上でみますと 20%弱が県庁あるいは県の水産試験場の皆様でいらっしゃいます。そういう意味でもぜひ連携を深めていく必要があろうかと考えております。

水産学会では令和４年度から、理事会のほうに全国水産試験場長会からご推薦をいただいた方を会長指名理事としてお迎えをして、社会連携を担当するということをお願いしております。今年度につきましては前の北海道立総合研究機構　中央水産試験場長でいらっしゃいました木村稔さんをお迎えしております。正式には次の５月の総会で理事の承認ということにはなりますが、すでに主務幹事の賛同を得て理事会に参加していただいておりますので、ぜひ木村さんを通じて水産学会の理事会に、いろいろ研究の面も含めて御意見をいただければと考えております。

それから、これからの連携のひとつとして考えているところを申し上げますと、昨年度は水産学会理事会主催シンポジウムとして「我が国水産業の成長産業化と強靭化に向けた今後の研究技術開発」ということで、水研機構ともいろいろ一緒にやらせていただきましたが、できれば来年度辺りには全国水産試験場長会と共催、あるいは連携した形で、現場の課題と研究について議論できるような理事会主催のシンポジウムができればと希望しておりますので、ぜひ幹事会の皆様方とも相談させていただければと考えております。

特に昨年度からこの場長会から、水産業と水産分野の試験研究の現場におけるトピッ

クスを取りまとめていただいた情報・課題提供の資料を 2 月にいただいております。これをいただきましてすぐに、水産学会の理事会のそれぞれ支部の担当、北海道、東北、関東、中部、近畿、中四国、九州と 7 つの支部があるわけですが、その支部の担当の理事、あるいは、漁業懇話会、増養殖懇話会、水産利用懇話会、環境保全委員会、こういった分野ごとの研究を担当している理事がおりますので、そちらのほうに資料を渡して、ぜひそれぞれの中で講演会やシンポジウムを地域なりと一緒になりながらやるようにと連絡をしてあります。もし、お声がけがあればぜひご協力をお願いしたいと考えております。

また、最近水産学会の中のトピック的な話として、若手の会というのをやっておりまして、水産試験場の若手の方も来ていただいていますが、春と秋の大会の時にシンポジウムとかナイトポスターセッションというのをやっています。ナイトポスターセッションというのは会員でなくても来てポスターを張って、しかも缶ビールを片手に持ちながら議論をするというような場となっておりますので、是非若手の方は、会員でなくても参加いただいて仲間づくりを行っていただけるといいのかなと考えております。

当水産学会では多くの学術団体とも連携をさせていただいておりまして、水産・海洋科学研究連絡協議会というのがございまして、水産学会以外の日本海洋学会、水産海洋学会、水産工学会、魚病学会、水産増殖学会、水産学会など 16 学会が入っております。こちらでいろいろ活動しておりまして、こちらは日本学術会議の水産分科会と連携して、またシンポジウムをやるというようなことで、いろいろ学術の世界でもシンポジウムなり、課題的なものであり、現場での問題を取上げたシンポジウム、講演会、いろいろ計画しております。ぜひこういった内容については水産学会のホームページをご覧いただきますと関連情報ということでお示しさせていただいておりますので、ぜひお時間のある時ご覧いただければと思っております。

最後になりますけど、本日この全国大会で皆様方の研究、並びにこの活動が益々活発になり、実りあるようになることを御祈念申し上げて御挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございます。

（３）開催県

長野県農政部　部長　小林　茂樹

皆さん、こんにちは。長野県農政部長しております小林茂樹と申します。全国水産試験場長会全国大会の開催に当たり、開催県として一言御挨拶を申し上げます。

本日は、ここ長野県におきまして全国水産試験場長会全国大会を開催しましたところ、水産庁の髙橋部長様をはじめ御来賓の皆様、及び、全国の水産試験場長会の皆様には、大変お忙しい中、北は北海道から南は沖縄まで、全国各地から御来県いただきまして誠にありがとうございます。心から歓迎を申し上げます。

さて、皆様、長野駅に降りられて寒いなと思われたのではないでしょうか。長野県はご承知のとおり周囲を標高３０００メートルクラスの山々に囲まれた海なし県でございます。しかしながら、北には日本海へ通じます犀川、千曲川、そして、南には太平洋に通じます木曽川、天竜川、そして諏訪湖などの河川湖沼、また、安曇野地域に代表される豊富な湧水などの恵まれた自然環境がございまして、そのような環境の中で、先人たちの弛まぬ増養殖技術開発により水産業が発展してきたわけでございます。

なかでも、養殖業は本県の水産業の基幹をなすものでございまして、本県の冷涼な気候と清らかな水を利用したニジマスやイワナなどのマス類の養殖を中心に、コイや水田を活用したフナの養殖などが盛んな地域でございます。

そして昨今では、本県の養殖ブランド魚である信州サーモンが、昨年軽井沢で開催されましたＧ７外相会合でも提供されるなど、県内外で評価をいただいているところでございます。信州サーモンの開発につきましては、平成 20 年度に本場長会の会長賞を受賞しておりますので、ご承知の方もいらっしゃるかと思いますが、本県の水産試験場が約 10 年の歳月をかけて開発をいたしまして、平成 16 年（2004 年）に新たな養殖品種として誕生してから今年で 20 年となります。

デビュー当初は種苗の普及や知名度向上などに大変苦労したわけでございますが、関係者の皆様の御協力、御努力によりまして、着実に出荷量を増やすことができ、現在では観光業が盛んな長野県におきまして重要な食材として、生産者はもとより、ホテル、旅館等観光関係者の方々にも無くてはならないものとなっているところでございます。また、生産者からは「信州サーモンができたことから養殖業を子供に継がせることができた」といった大変うれしいお言葉もいただいております。手前味噌にはなりますが、これらのことは水産試験場の技術が地域の産業に貢献できた良い事例と思っておりますし、この技術を通して地域の水産業を元気づけていくことが期待されているものと考えます。

水産業を巡る情勢は先ほどからおっしゃられたとおりでございますが、異常気象、災害の激甚化、漁場環境の変化、外来魚・カワウなどによる食害、魚病被害など多岐にわたります。これらの課題を解決するためには、国や中央の研究機関、そして地方の試験

場の情報共有と連携が不可欠であると考えます。こうした点からも、本日の会議では活発な議論が交わされまして、実り多き大会になりますことご期待するところでございます。

結びになりますが、朝晩大変冷え込んできております。長野駅を降りて山々を見ていただくと若干白くなっているところが見えてきています。信州サーモンはもちろんのこと、本県の試験場が育成しました、果樹で言いますとブドウのクイーンルージュ、黄色いリンゴのシナノゴールド、そういった農産物、加えて、蕎麦やおやき、日本酒、ワインなど信州の食も、ぜひこの機会にご堪能いただき、お土産としてもご購入していただければと思っております。

また、御参加の皆様のご活躍、そして全国水産試験場長会の益々のご発展と皆様のご健康であることを祈念いたしまして、歓迎の挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。